

## 福岡市博物館蔵 野村望東尼『雑歌草稿 二』翻刻と 解題：『向陵集』との関連において（続）

進藤，康子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10330>

---

出版情報：文献探究. 45, pp.50-59, 2007-03-30. 文献探究の会  
バージョン：published  
権利関係：



## 福岡市博物館蔵

### 野村望東尼『雑歌草稿 二』翻刻と解題

—『向陵集』との関連において（続）—

#### はじめに

福岡市博物館蔵『雑歌草稿 二』は、江戸時代後期の女流歌人、野村望東尼の自筆歌稿である。

本稿は、前回前々回と二号に互って、『向陵集』との関連において述べた拙稿『歌集—言道・望東・貞能・宇逸』（『文献探究』43号平成十七年）、『みものとしうまのとし』（『文献探究』44号平成十八年）に引き続き関連する和歌資料の紹介およびその考察である。

#### 解題

この『雑歌草稿 二』の九十三首のうち、八十五首が『向陵集』に採られており、しかも、それらには、歌と詞書に細やかな推敲の手が加えられている。本資料は『向陵集』収載過程と、推敲前の望東尼の和歌の形を知ることが出来る貴重な資料である。とともに、『向陵集』

に載せられていない和歌を新たに採取することができる。

詳しく見ていくと、歌番号13、18、27、36、59、83、88、93等は、編集段階で削除されており、今まで知ることのなかった新出の望東尼の歌である。そして、望東尼の歌友である秦貞子が亡くなり、悲しみにくれる箇所の記事も、『向陵集』では部分部分削除されているのだが、本資料では、詳細なやりとりや場の緊迫感など、刻々と移り変わる状況を描写しており、これらによって新たに当時の状況を窺い知ることができる。

加えて、この『雑歌草稿 二』は、言道門下の歌会である「月ごと」に惜しむまどゐ」に関して、『歌集—言道・望東・貞能・宇逸』（以下『歌集』と略）と同様に、月次の歌の例会の発足場面を髣髴とさせる部分で、より詳細な記載がある。つまり、『歌集』と重複する部分が見られ、歌の修練の場として最も大切な定例歌会の開始時期を、このように繰り返し数本の歌稿に認めていることが知られる。よって、『雑歌草稿 二』が記された時期を、この重複部分の位置や、44番歌の詞書

進藤康子

「嘉永四年のはるのはじめに」などから考えると、『歌集』と『みのとしうまのとし』の中間に、本来位置する資料と推察されるのである。

また、46番歌詞書「むつき十八日となりのういつ(宇逸)ぬしが」、58番歌詞書「うづき十八日ゆきとしのうしがいへにして」が、『向陵集』では削除されており、いつ、誰とという的確な情報は、わからなかったのだが、本資料により補足することが出来、漸く判明した。つまり本資料も、前回同様『向陵集』を多面的に補うことの出来るものとして大変有効なのである。

また、83番歌にみえる「あばら」などの歌語ではない用語は、伝統的な和歌においては今までみられなかったものであるが、言道も、たとえば、『大隈言道家集』や『今橋集』などに、家のあばら骨を歌に使用し、その他にも、ぼうぶらや、はきだめ、塵などの語を頻繁に歌に取り入れている。やはりこれらの影響が本資料の随所にあるといえよう。

望東尼の『上京日記』以降の作品では、徐々に変動していく世の移り変わりに敏感に反応し勤皇の志士を匿い続け、思想家として活動していく姿があり、覚醒したように、今までの彼女の作風とは全く一線を異にしていく。だが、それは突然ではなく、やはりその複線は、個性を持った一歌人として言道や夫貞貫らから長年の間、育まれ見守られて、その自由闊達な本領が水面下で熟成されていったからこそ、次の展開があつたのである。その例の一つとして、言道は(文久三年)『向陵集』の序に

月花を愛づるころあるを、ころある人といひ、これを愛づる心なげなるをただ人といふ。野村望東子幼きより心ありて、ことによりものに触れて詠みいでられたる歌いくそばくといふ

ことなし。

と認められ、

おのれ若かりし時より、その歌どもを、今の老いに至るまで見つるに、なべての人のころ及ばぬあはれを言ひ出でて、女のわざとは見え難し。

とその才能を男女の別なく見出し、男も及ばぬくらいに秀でていと強調している。そして、そこにその才女を長年見守り続けた師の姿がある。続いて、

都に上りて、堂上の愛でもあひ、京人も難波人もうらやましきものに

と記され、ここには、女としての制約もほとんど受けずに旅をし、堂上の人々とも交流し、当時最新の情報を手に入れていく彼女の逞しくも一途な生き様を列挙している。京都や大阪に住んでいる人でさえも簡単にはなし得ないことであるのに、博多から出てきた彼女が「堂上の愛で」にあうことは、羨ましい限りであつたに違いないし、かつ、彼女の自立した人として、人脈を作る力に長けていたことが裏付けられる。言道自身、愛弟子望東尼の予想以上の力量に驚き感嘆し、羨ましいと素直に思った感情の発露であつたろうことは推測に難くない。更に、

おのれ教え子あまたなれど、またたぐひあることなし。と、類例がないほどに秀逸な歌人だと最大限の賛辞で結んでいることから類推できるであろう。

本資料は、言道歌壇の成長期にあたり、門下生たちの歌の例会や歌合において、あるいは身近な会合において、日常生活の細やかな発見や、感性の赴くまま一瞬一瞬の心の静動に目を向けた歌が大部分である。

わが一喜一憂を、その時々々に詠まれた習作がほとんどであり、実情を伴なう作風がより現実を映し出している。

## 翻刻

### (一) 凡例

- 一、福岡市博物館蔵、野村望東尼資料『雑歌草稿二』を底本とした。
- 二、和歌に通し番号をした。
- 三、表記はできるだけ底本の記載通りに翻刻することを基本とした。漢字平仮名も全て底本のままとした。ただし、繰り返し記号の「ト」「ク」「カ」などは、便宜上、現行の文字に改めた。
- 四、清濁を区別し、適宜句読点を補った。
- 五、丁うつりは「」で示し、丁の表裏はオ・ウと表示した。
- 六、明らかな書写ミスや仮名遣いの誤りははその箇所にママと記した。

### (二) 書誌

一、資料請求番号 029 福岡市博物館 野村望東尼遺品目録

- 二、書型・寸法 半紙本(縦23・6糎 X横15・5糎)
- 三、卷冊・刊写 一卷一冊存 写本
- 四、表紙 後補 外題 「雑歌草稿二」
- 元表紙 墨書直書 「雑歌草稿二」 本文共紙
- 五、料紙 楮紙
- 六、構成 10丁 一面十一行 和歌一行書

### (三) 翻刻

雑歌草稿 二「(表紙)

1. みるものきくものにつけてよめる  
かたりあふことばもわかぬ山人のとなりどちともなりにけるかな
2. としふるき心のあかはやまの井の水にあらへど猶のこりつ  
つ  
いとぐるま
3. あさよひにいが引糸をぐるまのめぐりめぐりておなじことのみ  
をとめ
4. ころもでのわき寒げなるをとめどもはる待ちかねてひくね  
せり哉

春のうたあはせに

5. むらとりのゆくかたわかずたちこむるをちのかすみはいく  
へなるらん
6. 人の見ていやまさりなるうつせがひ身のなきがらの猶きよ  
げなる
7. ききながらまじろひまもひさしきになきもつかれぬそのの  
鶯「(1・オ)  
またみる
8. わたつみのそこまではるのゆくほどをまた見るふさのほそ  
きにぞしる  
ささのやよりよとてつかひのきたりなるかへ  
り(こ)こに
9. なつかしきかたよりさそふ春風に身のうきちりもはらひて  
ぞゆく  
うたあはせのうたとて
10. ねやとさす人をとどめてうぐひすのくれをかぎりのこゑをき  
く哉  
あづまのどのやけさせ給ひて、よの中いとしづま  
りけるに、もりさだのうしのむすめぎみのうせ給  
ひたるよしをききて、かしこにゆき見るに、庭な  
る花ざかりなりければ
11. かはりゆく時よのさまもよそにして咲もなづまぬ花さくらか  
な  
はなのうたとて「(1・ウ)
12. 花みると人のむれきてきのふよりとほざかりぬる鶯のこゑ
13. さく花にむかひてたてば小山田のそほつもこころありげなる  
哉  
やまふぢを
14. みやま木をまとひつくして花のえを引よちかほるさけるふぢ  
なみ  
わらぐつ
15. われのみやこしかとおもふいはのまにぬぎすてられし人のわ  
らぐつ  
てふ
16. はるふかきみどりが中にましろなるつばさ見えつとぶこて  
ふかな  
ひはどり
17. 花ちりてさびしくなれるこがくれにひはなきくらす春のはて  
かな  
「(2・オ)  
うへのつぼねにつかへける梅のかたといふ人、は  
はの七十のがしけるとて、うたをこひければ、か  
へでの枝にさして
18. としごとにわかがへるとてをえいかへし君がよはひのかずは  
よむつき  
かけひ
19. さみだれにかけひの水のまさりきてそこのくちばもいまぞな  
がるる  
つゆのいとしろくおきて風さむかりけるあした  
に

- 20 う月までしもめくつゆのおくやまは冬のまなるころもぞ  
きる  
おなじく十八日のだい  
かきの花
- 21 やまがきの花とも見えぬはな見ればみのほどほどにさかりあ  
りけり  
蝶
- 22 夏野のにさきぬるはなをしるものはすがれるてふとわれとな  
りける 一(2・ウ)
- 23 をちかたの山のはごとにかさなりて風をとどむるふゆだちの  
くも  
六月のうた  
山べにゆきけるみちにて
- 24 あたりにはいへも見えぬどいはしみづぬしありがほにすめる  
山かげ  
あきのはじめに
- 25 まどろひしひまより秋の風たちてすずしくなせるいほのうち  
哉  
ともどちきたれる時にはなるちはらにまとあし  
て
- 26 おもふどちこはぎがもとにむかひあてかたるにまじるすずむ  
しの声  
いへをゆづりて
- 27 いへをのみこにゆづるかとおもひしをよのくさぐさにそへて  
けるかな
- 28 わがいほのなきよののちのしるしにとおもひし松もをるのわ  
きかな  
あきのうたあはせに
- 29 はなすすきひとりおくれあきの野のまたなくさのかずぞ  
たらはぬ  
かどあるもまるきもまじるさざれ哉同じなきさの波にさらせ  
ど
- 30 かかげてもあきたらざりしいよすだれおろしがほなるけさの  
あきかせ
- 31 わがやどのかど田のいねのほにいでてわせをわせともしられ  
けるかな  
九月ばかりあめながくふりけるころ 一(3・ウ)
- 32 よひよひに月はくもりてあぢきなく雨ながつきとなれるあき  
かな  
おなじくはつかばかりにのむらもりさだのうし、  
つまぎみあやふげになやみ給ふを、ゆきてあつか  
ひきこゆるうち、ささのやにおくりける文のはし  
に
- 33 くれてゆくあきのひかずのほどなきにおなじさまなる人をこ
- 34

そ見れ

あるときに

35 ひとかたに心のいとよりかねてみだるときはちすぢなりけり

つきのころやまざとにありて

36 やまざとも月のさかりとなりしよりよはにも人のこゑぞきこゆる

月夜ともし火

37 くもれども月のさかりはともしびをけちてもあかきいほの内かな  
「(4・オ)

冬のはじめに

38 ねやのとをあくるかたより吹風にいでまよひぬるゆふけぶりかな

39 はるをまつしたのこころのまだきよりありける見ゆる梅さくら哉

もりさだのうしがつまぎみなくなられて、またの

月のそのひにうしのもとに

40 ひとしらぬこころのうちのふぢころもぬぐとはなしにたつ月日かな

彙というだいに

41 としごとに生そひにけるひこばへに花のおやきはおとろへにけり

ある時に

42 よどみなき月日のみをにたぐひつとなづむこころもながれゆくかな

小川「(4・ウ)

43 わがやどの小川の水はもみぢばのほかにはちりもうかばざりけり

嘉永四年のはるのはじめに

44 老そふるとしをねしまにかさねても今朝のねざめのこちよげなる

はつはるのこほりを

45 池水ははるも得しらすじうめの花さきぬるかげもへだつかふりに

おなじまくらを

46 くれぬとて枕とるだにめづらしくはるのはじめのこちよげなる

むつき十八日となりのういつ(宇逸)ぬしがたち

47 めでたしとおもふまもなくはつはるのなかばすぐとてひけるかどまつ  
「(5・オ)

門松を

48 うめの花見つゆくまに人はみなかすみのおくになる大路かな

な

うめ

49 さくかとしてたちいづる老のこころにもげにおくれたるそののうめ哉

うめ哉

かすみ

50 なみたてる松のまもりて野よこにたちなびきたるあさがすみ

哉

かさ

51 うめがかはとどめあへねどかへりきてぬぎつるかさのこる  
花びら

正月つごもりにかれこれささのやにゆきける時、  
けふをはじめとして月ごとにをしむまとゐをせん、  
といひあはせてすなはちよめる

52 くれはつるはるのほてにはあらねどもまつひとつきををしむ  
けふかな

正月十六日による

53 うめもまださかりこなくにはつ春の月かげそむるよとはな  
りにき

樹上露を

54 むらだちのまつのはしろくしもふれどたちまじりぬるはるが  
すみ哉

遅日

55 のびまさるほどはわかねどはるのひのいでいる山をかへてけ  
るかな

かどの柳を

56 わがかどの柳のまゆのおひしよりひらきさしてもおくかたど  
哉

はるのくれかたに

57 くもりびのあけくれわかでゆくはるになきさかりたるうぐひ

すのこゑ 「(6・オ)

うづき十八日ゆきとしうしがいへにして

浮木

58 波がくるいでふるくひくちてこそうきいでてよにもながる  
べらなれ

水

59 いはまよりながるる谷のしみづだになつむやにごるはじめな  
るらん

かはほり

60 おもふごとげなる時はかはほりのかをおふさまおもしろ  
きかな

わかれ

61 あふこともわかるることもなれなれてよのつねにのみ思ふど  
ちかな

ほたる

62 たに川にみだれあまりてねやまでもとびいるほたるいくらな  
るらん 「(6・ウ)

こひのうたとてよみける中にみよへだてたる

63 うちわびてまつとは人のしり乍かにうきめをみよとへだつ  
る

あさがほ

64 ひかげさす垣のあなたにまどひでて暎はじめたるあさがほの  
はな

まさし

65 夏の日のやくばかりなるまさしにもすすしげにいるあきつむ



しかな

ほとけ

66 はぎが花まづさくはなはみほとけのたむけにだにもをられざ

りけり

いひ

67 いひかしくしばのけぶりのさながらにねやのかやりとなるゆ

ふべかな

あらそふ 「(7・オ)

68 あらそはでよどにながる水だにもせをこすときはくだけで  
ぞちる

大やけにさだのりがねがひふみをたてまつらしめ  
て、このうたいとおどろおどろしく、いかなる大  
事や引いでむととて、さるべき人々たのみきこえ  
て、よるひるとなくもりらしむ。しばしだにここ

ろやすからでともにまもりけるほど、秋の中ばも  
すぎてはつかあまりいつかのよ、かれこれととも  
にかたりあかして、よひよりねたる人をおこして  
つまなるたねこをもとにまもらしめて、あかつ  
きかたよりしばしのまとて、よひよりおきたる  
人々とともにねたりけるによもあけぬめり。まど  
ろみしどもおぼえぬにひとびと立さわぐこゑあわ  
ただし。ただゆめかとのみおどろきて 「(7・ウ)  
つとおきいでて見ればめもあてがたきさまして、  
さだのりかたちなやみたるほどなりけり。なほゆ

めにやとのみまどひなげくうち、はやいきもたえ

いりぬ。そのときのことどもかくばかりものする  
も、ほひなくくるしけれど、おもひしづめてあり  
なむもむねいたくらしいの事どもしづまりて、うき  
をりふしにくちすさびたるをおもひいづるまにま  
にかいつけおくとて

69 このよにてつるぎのえだになりはつるこのみを見むとおもひ

かけきや

伝ことありて、いへをいづるときにかべにかいつ  
ける

70 いまよりはにほひまさりて花もみぢかはるあるじにながく見

られよ

いなば 「(8・オ)

71 おひしげるいねの若ばにとよとしのいろはいまよりほのめき  
にけり

たかふ

72 よろづたびことのたかふになれなれてあすまたのまぬ老とな  
りぬる

六月六日に作田文貞といふくすしのみまかりて、  
そのひとめぐりに

73 わがいのちたのみしきみはさきだちてまた一とせもあるこの

身哉

小松

74 ふきかふるものともしらでわが廬のやねのうねうね生るひめ  
まつ

山田

75 をやまだをうちわたしたるむかひどちゆきかふ道はめぐりめぐりて

ものをりをりくちすさびたる 一(8・ウ)

76 老ぬとてむしにとりにもならねどもうれしき時もなくばかりして

みのむし

77 ははなくておひてしばかりよなよなにちちとのみなくみのむしのこゑ

夕月

78 ゆふ月よくるるもわかぬ秋のたにいねゆびさしてかへるさとびと

おなじく十八かにおきなのおきたり給ひて月のうた

よまむとてさまさまのだいの中に  
月初昇

79 をちかたにならべる松をよひよひにかへてもぼるあきのよの月

残月

80 ただひとつ今朝おちそめしきりののはあとに残るありあけの月 一(9・オ)

さまさまのものがたりのつひでに、もとときがうき時はいつもいづれもながなくもがなとこそいひもいで

81 さきだちしこにかはらばとなげきしもながらへぬればいつはりにして

はべれどいひければおのれもこそはさなむとて

九月ばかりより冬のはじめつかたまでことにより  
ていひいでたる

82 あまたとし身をいたづらに過ぎぬとおもふけふさへさながらにして

83 をさまれるみよにあまへてもものふの心はいへのあばらなりけり

84 たかねよりみ谷のそこのあばらやもほどほど立ゆうふけぶりかな

ゆきをまちけるころ

85 またれつるしるしばかりのはだれ雪ふるかと思ればさすひかけ哉 一(9・ウ)

はつゆきのふりけるひに

86 冬ごもる老のねやとをやすくもあくるは雪のちからなりけり

ゆめ

87 ひとつこともさめておほえずなりぬるやまことのゆめといふばかりけり

源平桃

88 おなじきにいろわきてさくももの花こころもふたつありげなる哉

しきみを題にして

暮春の心を

89 のに山にはるをおくれてかへりてはやどのしきみもこえうかりけり

このまの月などをみて

90 まつのはにあまれる露のしたたりておつるまにさへやどる月影

水中日「(10・オ)

91 まし水のこそにしづみてひかげさへおのれと夏をよぎがほにする

なき

92 かは水のよどみよどみにおひいでて名さへもなきの花さきにけり

となりのいへやけかかりたる時

ひさしうござりける人のとぶらひきたるに

93 はなもりちり春もくれにしわがさとわらひもえさば君がこましや「(10・ウ)

【付記】

本稿の資料閲覧、および翻刻については、福岡市博物館に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を表する次第である。

猶、本稿は、福岡女子大学学術研究助成による、研究成果の一部である。

(しんとう やすこ・本学大学院博士後期課程)